

膝と車検

神崎 八重子

車検を終えた車が帰ってきた。びっくりした。長年乗った車でしかもすっかり汚れていたのに、まるで新車のよう光っている。

汚れた車の訳は、思わぬ出来事が起きたことであつた。半年前のある日、小さな水路をヒョイツと越えたら、右膝で鈍い音がした。まるで操り人形の足のようにならんとあつて、力が入らない。

レントゲン写真に軟骨がなくなった膝が映っていた。入院も手術も必要なかったが、膝は炎症を起こし激痛で顔がゆがむ。それまで一日中クルクルと動き回っていた毎日が一変して、車の掃除どころか歩くことさえ一苦労になった。が、不思議なことに運転は膝に響かない。車が心強い足になってくれる。廃車の時期がきている車だったのだが、こんな事態では慣れた車でなければと、車検を依頼したのだった。

ドアを開けてみた。車内は一目で、心を込めて磨いてくださつたことが分かる。心地よい運転席に座ると、肩からすーっと力が抜けていき、ふと浮かんできた。

そうだ、二足歩行は人だけだ。人間がもし二足に進化していなかったら？ キリンは首、象は鼻が長くなった。もし人が四本足だったら「考える葦」にはならなかつただろう。

立ち上がって歩くうちに、どんどん生まれ育っていった知識。言葉を生みだし文明を広め、どこまでも進化する。「まだまだ一部しか解明できていません」と課題を見つけ、あちこちの分野で不可能を可能にしていく。

膝の軟骨は5ミリだそう。5ミリでも一度なくなれば、再生はしないと医師から聞いた。私の膝も、今は筋肉を鍛えて支えるしかないが、注射一本で、「はい軟骨出来ました」となる日は遠くないような気さえする。

半年経つた膝は、薄紙を剥ぐほどの回復中だ。筋肉が頑張ってくれているおかげでなんとか日常生活が送れている。痛みもあるが、重い体を長年支え続けてくれたのだ。無理もない。これからは膝に問いながら、仲良く気長に付き合っていく。

あれ？ 助手席と背もたれの隙間に挟まった、小さな白い物が目に入った。なんと孫の好きなぽん菓子だ。何倍にも膨れた米の一粒が、ちよこんと収まっている。幼子のかくれんぼのようで何とも愛らしい。手のひらにのせてみると、「大丈夫。よくなるから」そつとささやいてくれた気がした。

作者 神崎八重子

題名 膝と車検

山陽新聞夕刊

2019.12.05